「年寄の私らの悩みを聞いて下さい！」
団地の片隅にひっそりと暮らす孤独な老人の心が開いた……

文部大臣賞
教育映画祭最高賞，NHK賞
東京都教育映画コンクール金賞
キネマ旬報ベストテン第2位
優秀映画鑑賞会推薦
文部省特選

家庭の年輪

劇映画 カラー 64分

厚生省推薦
日本PTA全国協議会推薦
日本青年団協議会推薦
全地婦連推薦

企画／貯蓄増強中央委員会
製作／株式会社 桜映画社

■ 製作意図

老人の問題は、忘れられている現代の大きな問題であり、将来ますます大きな問題になるでしょう。

この映画は戦後の経済成長を物語るかのような団地に舞台をとりました。団地アパートは急激にふえて、現代の都市の新しい生活様式になりつつありますが、上べだけ一応立派な各戸の生活に本当の満足感や安定感があるかどうかとなると甚だ疑しい。人びとは日々の生活に追われ、周囲にはエゴイズムが渦まいている。老人の不幸も実はその中にあるのではないでしょうか。

老人の存在を全く忘れたその建て方も現代を象徴している様に思われます。団地に住む夥しい若い家族の背後で、彼らを苦労して育てた老人たちがどこか孤独でおそらく経済的にも楽でない日々を過している事が想像されます。

この映画が、単に団地の老人のみでなく、広く現代の老人のあり方を考え、やがては自らも迎える老後とその備えに対する問題をも考えてみる機縁になれば幸いです。

■ あらすじ

中島照代(65才)は、団地に住むタクシー運転手の三男の三郎の家庭に身を寄せている。照代が達者で、孫の世話も炊事もひきうけているので、嫁の久子はパートタイムで働きに出、三郎も個人タクシー開業を目ざして精を出している。

或る日照代は、団地自治会の新聞を配った帰り道に、田舎から出てきたばかりの岡本順造（69才）に出会った。順造は、苦労して大学を出した息子の事業の失敗で、田舎の家まで手離し娘の明美の所に身をよせている。

明美の夫は、典型的なサラリーマンで、家庭は表面派手だが、内実は生活に追われている。明美は、父を引きとることで、夫への気がねや、高校生の長男の受験勉強の邪魔になるのではないかという不安等から、ついきつく言ったりする。順造も福祉事務所を訪れ老人ホームに入る事を考えるが、無料のには子供がちゃんとしている場合入れず、有料は月一万円余もかかると知ってあきらめる。

幸福なはずの照代も孫を甘やかすなと幼稚園の先生に注意されたり、三郎の会社の家族慰安会に切符が足りなくてとり残されたりすると余計者の様なみじめな気持に襲われる。

こんな順造と照代が、道で出会い団地の寿司屋で酒を酌みかわした。亡夫から残された貯えがあり、生活の基礎の固まっている照代は嘆く順造をはげます。その夜照代は鉛筆をなめなめ「拝啓団地新聞様、年寄りの私らのなやみを聞いて下さい……」と手紙を書き出した。この手紙が、小学二年の孫の間違いで回覧板と一緒に隣近所を廻ってしまう。手紙には順造の姿も書かれているので虚栄心のつよい明美は仰天して照代の家にどなりこむ。久子も照代もひたすら恐縮するが、自治会の世話役の矢巻さんは「おばあちゃんの手紙」にすっかり感心して、順造の部分をカットして団地新聞に載せたいという。

家に戻ると明美は、長男から順造が近くの病院で働き始めたと聞きその病院に行く。そこで老いてなお働こうとする父の姿を見てはげしく感動する。この話を聞いた夫も義父の悲劇と自身の老後を改めて考え、夫婦の間にも忘れていた暖かい感情がよみがえってくる。団地では、「おばあちゃんの手紙」がきっかけとなって、老人クラブを作ろうという気運が起ってくる。

■ 製作スタッフ

製作……村山英治
脚本……千葉茂
監督……堀内甲樹
撮影……佐藤昌道
音楽……間宮芳生

■ キャスト

照代……小峰千代子
順造……山田己之助
久子……中西妙子
三郎……高原駿雄
信男……小栗一也
明美……平松淑美
矢巻……野村昭子
薬局主……瀬良明

☆ 各方面からの反響

人間を考えさせる映画

登川直樹

いつかは私たちも老人になることを知らないわけではないが、まだ老人でない人が、この問題を考えなければいけないという事実を、これほど巧まず謙虚に語りかける作品はない。私たちはこの映画から新しい人間関係のありかたを謙虚に考えたいものである。

（日大教授・評論家）

働くよろこび

大浜英子

老人ホームがよい……。老人クラブもある……。なるほど……。それで万事解決でしょうか。

この映画は答えています。働くことはどうだろう——と。何かの役に立つということ、生甲斐をみいだす幸福は、若いものでも、としよりでも同じです。ことに、としよりは、きのうまで、働いて自分の生活をささえてきたひとです。働くよろこび！そうだ……と、一つの明るいふんいきにうたれます。

（評論家・中央選管委員長）

すがすがしい感動

原田正二

老人問題を扱った作品は、陰気で、ジメジメした感じを受けるものですが、この映画は見終って、すがすがしい気持になりました。前向きの製作態度が、老人生活の残酷な姿や特徴を打ち消しているのでしょう。

（厚生省広報専門官）

利用価値の高い作品

大内秀邦

平均寿命がのびたことは確かだが、生き永らえた老人がどのように扱われているか、現実の問題に対して、人びとはあまりにも無関心すぎる。

映画は、若い人たちから年配者にいたるまでいろいろと考えさせるものがあり、きわめて利用価値の高いすぐれた作品である。

（映画評論家）

家庭の年輪について

貯蓄増強中央委員会
事務局長　武中賢一

変貌きわまりない現代社会の中で、忙しく働く人々の家庭生活では、とかく老人の問題は忘れがちである。

若い夫婦を単位とするこの頃の家庭では、過去の暮しの遺産ともいうべき老人の知恵も生かされていない。……今の家庭内の忘れられた老人の座、そのひそかな訴え、これをとりまく家族のありのままの姿を描いて、この映画は老人問題を、だれもが迎え、自らの老後の生活の問題として認識して頂き、老後に備える長期生活設計をすすめる目的で製作された。多数のご観覧をお願いしたい。

☆ 毎日新聞　評（四〇・六・一二　家庭欄）

あなたにも老後はある

映画「家庭の年輪」をみて

現代の若い家族は、日々の生活に追われてなかなか老後のことまでは考えがおよばない。また年寄りは、子供さえ教育すれば何んとかなると、ろくに老後の準備をしなかったというケースが多い。とかく忘れがちな老人問題と正面から取り組んだ劇映画「家庭の年輪」は、これを浮き彫りにし考えさせられる。そこで、この映画を見た嫁の立場、しゅうとめの立場にある、四人の主婦に話合ってもらった。

八十二才のしゅうとがいる主婦

「老人の気持がよくわかりますが、老人の方にも問題があるのではないか。〝年をとってまで働くのはみじめだ。周囲に大事にしてもらいたい〟という気持では、老後のさみしさはとても消せない。」

四十代の主婦

「映画の中でも、家庭の中にとけ込んで毎日を忙しく働いているおばあさんの方が生き生きしていました。」

五十代の主婦

「でも、老人向きの仕事は少ないし、家庭の中での老人の位置は微妙だ。家族にとけ込むのは結構だが、子供のしつけはやはり親にまかせてもらいたい。そういう意味からも、老人同志の接触の機会は必要ですね。」

三十代の主婦

「私たちは、年をとったら、若い人に負けずに、年寄りのグループで老後を楽しみたい。共白髪の夫婦だけで暮らせれば気がねもいらないし、それに越したことはないが、しかしいずれ夫婦の片方が先に死ぬと、子供の世話にもならなければならない。社会保障が十分でないだけに心配である。」そして四人とも、

「世話になる、ならないにかかわらず、産み育ててくれた老人を大事にするという、子供のしつけは忘れたくない」というのが結論。（抜粋）

頒布価格
16ミリ・カラープリント
¥ 300,000

株式会社　桜映画社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-20-1 千駄ヶ谷ビル4階　TEL. 03(3478)6110 FAX. 03(3478)5966